

# 中国古典詩における昼寝について

——唐代を中心に——

大橋 賢一

はじめに

柳花深巷午鷄声

柳花 深巷 午鷄の声

桑葉尖新緑未成

桑葉の尖 新たにして緑未だ成らず

坐睡覺来無一事

坐睡より覺め来たりて一事無し

満窓晴日看蚕生

満窓の晴日 蚕の生まるるを見る

これは、南宋范成大（一一二六—一一九三）「四時田園雜興六十首」（其一）である。この「引」に「淳熙丙午、沈疇少紓、復至石湖旧隱（淳熙の丙午（一一八六）、沈疇 少く紓ぎ、復た石湖の旧隱に至る）」とあり、この詩は范成大が晩年に蘇州の太湖に隱棲したとき、桑の葉が芽吹きはじめた春によまれたものであることがわかる。日常の何気ない隱遁生活の一齣を真昼に居眠りをしたときの春景色を通して描いたこの詩は、生活に密着したものをしきりに詩の題材とした宋人らしい作品である。范成大と同じく北宋蘇軾（一一〇三—一一〇一）「南堂五首」（其五）にも昼寝が取り上げられている。

掃地焚香閉閣眠

地を掃いて香を焚き閣を閉して眠り

簾紋如水幄如煙

簾紋は水の如く幄は煙の如し

客來夢覺知何処

客來り 夢より覺め 知んぬ 何れの処ぞ

挂起西窗浪接天

西窗を挂起すれば浪天に接す

この詩は元豐二十六年（一〇八三）夏、蘇軾が黃州に左遷されたときの作である。「簾」は夏季に寝台に用いられた、竹や藤であんだしきもの。結句には浪と天空のぼんやりとした境界線が印象深く描かれている。范成大にしても蘇軾にしても昼寝から目覚めたときに目にした風物を印象的に描いている点は共通しているが、ただ蘇軾は隠遁しているわけではないから、詩がよまれた情況は范成大とはやや異なっていると思われる。

このように昼寝についてうたった詩は宋代においては少なくない。宋人が昼寝を詩の題材として好んで取り上げているのは「詩人たちが日常の平凡な生活形態にも意味を認めたから」（桜井達彦「夏のひるね」『中国文学歳時記 夏』同朋社、一九八九年）だろう。先に引用した二つの詩では、昼寝という行為そのものについて否定的なとらえ方はされていない。少なくとも詩の中では昼寝に何らかの意味あいを付加するような表現はされておらず、昼寝から目覚めたときに感じられた田園生活中の季節の推移や風景がうたわれていただけである。

昼寝という行為自体は、すでに『論語』公冶長篇に取りあげられている。

宰予昼寝。子曰、朽木不可雕也。糞土之牆不可朽也。於予與何誅。

宰予昼寝ぬ。子曰く、朽木は雕るべからざるなり、糞土の牆は朽るべからざるなり。予においてか何ぞ誅めん、と。

宰予は弁説に長けていたという孔子の弟子の一人。この部分は、學問に怠けて昼から居眠りをしている宰予に対し孔子が怠け者に対しては何をいっても無駄だ、と述べていると普通解釈されている<sup>(三)</sup>。『論語』の中では、昼に寝るということは怠けるという行為そのものであって、日常してはならない否定されるべき行為と受けとめられている。同じく『莊子』知北游にも『論語』と同じく、昼寝が怠惰を表す行為として描かれている。

芻荷甘與神農同學於老龍吉。神農隱几闔戸昼瞑。芻荷甘日中蓐戸而入曰、老龍死。神農隱几擁杖而起、曝然放杖而笑曰、天知予僻陋慢訑故棄予而死。已矣夫子。无所發予之狂言而死矣夫。

芻荷甘と神農とは共に老龍吉に学ぶ。神農 几に隠り戸を闔<sup>と</sup>ざして昼瞑す。芻荷甘 日中に戸を蓐<sup>と</sup>きて入りて曰く、老龍死す、と。神農 几に隠り杖を擁して起ち、曝然として杖を放りて笑いて曰く、天は予の僻陋慢訑を知るが故に予を棄てて死したり。已んぬるかな夫子。予の狂言の發する所无くして死すかな、と。

『釈文』に「瞑音眠」とあり、「昼瞑」は「昼眠」と同じで昼寝をすること。師である老龍吉の死の知らせを芻荷甘から聞いた神農自身が昼寝をし続けていたことに対して「天は予の僻陋慢訑を知る」と述べているように、昼寝はやはり怠惰と直結する行為として認められていたことが、こうした話を通して知ることができる。

冒頭に引用した范成大や蘇軾の詩には、昼寝をしているからといって怠惰な生活をしているとか、またそうした行為をすることに何かしらの罪悪感を感じているとか、そういったことは一切述べられておらず、『論語』や『莊子』とは異なる見方で昼寝という行為がうたわれていた。そもそも中国古典詩において、昼寝はいつごろから詩の題材としてとりあげられるようになり、またどのような人の、どのような行為として描かれてきたのだろうか。以下本稿では、主に昼寝をとりあげた詩を時代順に検討し、宋人にどのように引き継がれているのかを探ってみたいと思う<sup>(四)</sup>。

## 二 唐以前の昼寝

唐代以前には昼寝を意味する語句を含んだ作品は少なく、『文選』には宋玉（生卒年未詳）（『高唐賦序』（卷十九））にみえるにすぎない。

昔者楚襄王與宋玉遊於雲夢之台。望高唐之觀、其上独有雲氣。崦嵫直上、忽兮改容、須臾之間、變化無窮。王問玉曰、此何氣也。玉對曰、所謂朝雲者也。王曰、何謂朝雲。玉曰、昔者先王嘗遊高唐、怠而昼寝、夢見一婦人。曰、妾巫山之女也、為高唐之客。聞君遊高唐。願薦枕席。王因幸之。

昔者 楚の襄王 宋玉と雲夢の台に遊ぶ。高唐の觀を望むに、其上に独り雲氣有り。崦嵫直ちに上り、忽ち容を改め、須臾の間に、變化して窮り無し。王 玉に問いて曰く、此れ何の氣なるか、と。玉對えて曰く、所謂 朝雲という者なり、と。王曰く、何をか朝雲と謂う、と。玉曰く、昔者 先王嘗て高唐に遊び、怠たりて昼寝ね、夢に一婦人を見る。曰く、妾は巫山の女なり。高唐の客為り。君の高唐に遊ぶを聞く。願わくは枕席を薦めん、と。王因りて之を幸す。

楚の襄王が夢で美しい仙女と会ったのは、旅に疲れ雲夢台で昼寝をしたことがきっかけとなっている。仙女との出会いがかなうきっかけとなっている襄王の昼寝について、宋玉は怠惰という否定的な意味合いを付加するような表現をしていない。『論語』や『莊子』の場合は日常生活における昼寝が怠惰な行為と認められていたが、「高唐賦序」の場合は旅という非日常的な活動の中の昼寝ということもあるし、また襄王つまり権力者がとった行為ということもあつたから、特に昼寝に対し咎められるような意味あいが付加されることがなかったのだろう。「高唐賦序」における昼寝は、このように『論語』な

どとは異なる受け止め方がなされている。

宋玉以降、昼寝を取り上げたものは、詩に限って言えば梁簡文帝（五〇三―五五一）「詠内人昼眠（内人の昼眠を詠ず）」（吳兆宜『玉台新詠箋注』卷七）に到るまでみえない。この詩は昼寝をしている婦女の姿態を些細に描写した作品である。詩題に「昼眠」とみえるように、この詩は『論語』や「高唐賦序」とは異なり、昼寝という行為そのものに着目されている点が新しい。

北窗聊就枕 北窗 聊か枕に就き

南簷日未斜 南簷 日 未だ斜めならず

攀鉤落綺障 鉤を攀つかきて綺障を落とし

插振舉琵琶 振はを插して琵琶を舉あぐ

夢笑開嬌靨 夢笑 嬌靨を開き

眼鬟庄落花 眼鬟 落花を庄おさす

簾文生玉腕 簾文 玉腕に生じ

香汗浸紅紗 香汗 紅紗を浸す

夫婿恒相伴 夫婿 恒に相伴えば

莫誤是倡家 誤る莫かれ 是れ倡家なるかと

五句目以降から、婦女の居眠りが生々しくかつ妖艶に描かれている。「嬌靨」は愛らしいえくぼのこと。眠りながら好い夢をみている女性が笑みを浮かべていることを表す。眠っている婦女に対する詩人の視線は、うしろ簾模様のとががついた腕と、

あかい薄絹に染みた寝汗に注がれる。起きているときにはあらわれることがない、女性の艶やかさが見いだされたからこそ、昼寝をしている姿が詩に取り上げられたのだろう。このように、簡文帝の詩では昼寝は女性の色氣を引き立たせるものとして描かれている。また、簡文帝と時代をほぼ同じくする沈約「冬白紵」（『樂府詩集』卷五十六）にも「寒閨昼寝羅幌垂、婉容麗心長相知（寒閨の昼寝 羅幌垂れ、婉容麗心 長く相知知る）」というように、簡文帝ほど子細な描写はないが寵愛を失った昼寝をする婦女の姿が冒頭に取り上げられている。

以上が唐代以前の用例であるが、これらにはいずれにも『論語』や『莊子』に見えていたように、昼寝という行為に対し否定的な見解が付加されてはいなかった。しかしまた、先に引用した宋人のような士大夫の日常的行為として昼寝が描かれているわけでもなかった。「高唐賦」のように旅先という特殊な場面における王や、閨房の女性の昼寝が取り上げられている点で、ここでみてきた作品は、宋人のそれとは趣を異にしているのである。

### 三 唐代の昼寝

唐代に入ると、詩に描かれている昼寝をしている人物は女性だけにとどまらず多様化する。以下では、昼寝をしている人々の種類に着目して作品を検討していく（二）。

#### 1 婦女の昼寝

唐代でも、先にみたような簡文帝風の、婦女の昼寝を取り上げた詩がある。ここでは、「宮詞特妙前古（宮詞特に前古に

妙なり」(『唐才子伝』卷四)と称されている、中唐王建(七六六?~?)の「宮詞百首」(其九十二)をみよう。

鴛鴦瓦上瞥然声

鴛鴦瓦上 瞥然たる声

昼寝宮娥夢裏驚

昼寝の宮娥 夢裏に驚く

元是我王金彈子

元是れ我が王 金彈子もて

海棠花下打流鶯

海棠花の下 流鶯を打つなり

この詩には、簡文帝のような昼寝をしていた婦女の寝汗や敷物の模様がついた腕といった細かい描写はなく彼女が目覚めたきつかけが描かれており、簡文帝の詩とはやや趣を異にしているが、昼寝をしている女性を題材としている点で六朝の詩風を引き継いでいるといえる。また『玉台新詠』のような艶麗的作品を集めた晚唐韓偓『香奩集』所収の「昼寝」と題する詩にも、「撲粉更添香体滑、解衣唯見下裳紅(粉を撲ち更に添う香体の滑らかなるを、衣を解きて唯だ見る下裳の紅なるを)」といふように婦女の昼寝が描写されており、先にみた六朝詩に通じる表現がうかがえる。

昼寝をする婦女は、南唐李煜(九三七~九七八)「菩薩蠻三首」(其二)にも描かれており、詞の方でも題材として継承されている(七)。

蓮葉院閉天台女

蓮葉の院閉ざす 天台の女

画堂昼寝無人語

画堂に昼寝ねて 人語無し

抛枕翠雲光

枕を抛にして翠雲は光き

繡衣聞異香

繡<sup>たて</sup>とりの衣に異<sup>あや</sup>しき香りを聞く

潜来珠鎖動	潜び来たれば珠鎖の動きて
驚覺銀屏夢	驚き覺む 銀屏の夢
臉慢笑盈盈	臉 <small>かんはせ</small> 慢 <small>うろ</small> わしく 笑 <small>あま</small> いの盈ち盈ち
相看無限情	相 <small>あひ</small> 見て 限り無き情 <small>けい</small> あり

「翠雲」は女性の頭髮のこと。美人を仙女に見立て、また彼女のいる宮を「蓬萊院」と表現し、この世のものとは思われぬほどの彼女の美しさを強調する。続けて枕に臥せられた髪、衣にしみ込んだ香りが描かれるが、これは先にみた簡文帝の詩を髣髴とさせる細かい描写である（八）。

このように昼寝をする婦女は唐代でも綿々と引き継がれている一方で、女性以外の昼寝もまた取り上げられるようになる。

## 2 隠者の昼寝

盛唐李白（七〇一―七六二）「贈崔秋浦三首（崔秋浦に贈る三首）」（其二）には、隠者の昼寝が描かれている。

崔令学陶令	崔令は陶令を学びて
北窗常昼眠	北窗 常に昼に眠ぬ
抱琴時弄月	琴を抱きて時に月を弄び
取意任無弦	意を取りて無弦に任す
見客但傾酒	客を見ては但だ酒を傾け



為官不愛錢 官と為るも錢を愛さず

東舉春事起 東舉 春事起くれば

種黍早歸田 黍を種えて早に田に歸れ

詩題に見える「崔秋浦」については池州秋浦の県令であったこと以外はわからない。李白はこの崔某を、昼寝という行為を通して東晉の詩人かつ隱者であった陶淵明に喩えている。陶淵明の作品及び彼に關する伝記などには「昼眠」という語句は見えないが、陶淵明が昼寝をしていたという話は『晋書』隱逸伝に「嘗言夏月虚閑、高臥北窗之下、清風颺至、自謂羲皇上人（嘗て言う、夏月の虚閑に北窗の下に高臥し、清風颺として至りしとき、自ら羲皇上人と謂う、と）」とみえる。李白がこの詩を崔某に贈ったのは、末尾に「東舉春事起」とあることを踏まえると初春の頃だろうから、淵明が昼寝をした夏という季節とは異なる。李白が意識したであろう淵明の伝と詩に取り上げられている昼寝には、季節の違いはあるけれども、李白自身が昼寝という行為を、『論語』に見えたような否定的な価値観をもつてとらえず、隱者らしい一行為としてとらえていることは注意に値するだろう。

隱者の行為の一つとして昼寝がうたわれている作品は、李白に限らず大曆十才子の一人として数えられている李端（生卒年未詳）と司空曙（生卒年未詳）の詩にもみえており、李白と同じ意味合いを帯びた昼寝が継承されていることが確かめられる。まず李端「寄暢当（暢当に寄す）」をみよう。

麦秀草芊芊 麦秀 草芊芊たり

幽人好昼眠 幽人 昼眠を好む

雲霞生嶺上 雲霞 嶺上に生じ

猿鳥下床前 猿鳥 床前に下る

顔子方敦行 顔子 方に行いを敦くし

支郎久住禪 支郎 久しく禪に住む

中林輕暫別 中林 輕やかに暫く別れ

約略已經年 約略 已に年を経たり

李端が詩を寄せた「暢当」は、「多往来嵩、華間、結念方外、頗參禪道（嵩、華の間に往来すること多く、念を方外に結び、頗る禪道に參）」（『唐才子伝』卷四）じた人物である。また、李端ほか韋応物など当時の著名な詩人と交わりがあった。

詩の冒頭には、麦の穂が出て草が茂った様子と、静かに昼寝を楽しむ李端自身の姿が描かれている。続いて描写されている、雲霞のかかっている嶺や、猿と鳥といった山ならではの動物が床の側にいるという風景は、従来から引き継がれている典型的な隠者の居住空間と一致している。頸聯では、李端が顔回到、暢当が東晋の高僧支遁に喩えられ、俗世と隔離された場に身を置く二人の姿がうたわれている。こうした隠者に関わる表現から、ここでの昼寝は、李白と同じように俗世からの交わりを絶った隠者の象徴的な行為として描かれていることがわかるだろう。また、司空曙「閑園書事招暢当（閑園にて事を書し暢当を招く）」の前半には、

聞蟬昼眠後 蟬を聞きしは昼眠の後

敬枕对蓬蒿 枕を敬そはたてて蓬蒿そうこうに対す

羸病懶尋戴 羸病 戴おんを尋ぬるを懶おだり

田園方詠陶 田園 方に陶を詠よず

というように、病いのために昼寝を強いられている司空曙の姿が描かれている。「尋戴」は、王子猷が興に乗じて友人の戴安道を尋ねたことを意味し、ここでは友人を訪問することを表す<sup>(一)</sup>。司空曙は、病に臥して動くことも大儀だから暢当にきて欲しいと願っているが、彼が身を置いている場は詩題及び四句目にもみえるように、陶淵明の詩を詠じるのにふさわしい「田園」であつて、やはり李端と同様世俗と離れた場と考えられる。

冒頭にとりあげた范成大の詩の淵源は、李白、そしてそれを引き継いでいる李端、司空曙に求めることができるだろう。

### 3 士大夫の昼寝

李端や司空曙と共に大曆十才子の一人として数えられている盧綸（七四五？）<sup>(二)</sup>の昼寝を題材とした「首冬寄河東昭德里書事貽鄭損倉曹（首冬に河東の昭德里に寄するに事を書し鄭損倉曹に貽る）」は、先にみた李端らの詩とはやや趣が違っている。

清冬和暖天 清冬 暖天に和し

老鈍昼多眠 老鈍 昼眠ること多し

日愛閭巷静 日び 閭巷の静かなるを愛す

毎聞官吏賢 毎に聞く 官吏の賢なるを

寒菹供家食 寒菹 家食に供り

腐葉宿厨煙 腐葉 厨煙に宿<sup>とど</sup>む

且復執杯酒 且く復た杯酒を執り

無煩輕議辺 煩い無くして辺を輕議す

この詩では、四句目で「毎に聞く官吏の賢なるを」と称賛している、河中府の倉曹軍事である鄭損と、初冬の温和な陽氣につつまれながら昼寝をする気楽な盧綸とが対比されている。盧綸が身を置いているのは厨房の煙が滯るようなあばら屋である。しかし盧綸は何ものにも拘束されず、「日び 閭巷の静かなるを愛す」というように、自適な生活をおくることのできる現状に喜びをみいだしている。ここでの盧綸は一見すると世俗と完全に切り離された隠逸空間に身を置いているようだが、領聯で「毎に聞く 官吏の賢なるを」というように、昼寝ができるような気ままな生活が保証されているのは、鄭損のような有能な人物によるものであって、盧綸の生活は完全に世俗と切り離されているのではなく世俗における有能な人物の存在と大きく関わっているのである。また尾聯にも、盧綸が酒を飲みつつ気軽に辺塞のことを議論することができると述べられているところから、世俗に全く無関心というわけではない盧綸の意識がうかがえる。

この作品と同じく昼寝を詩に取り入れたものに、全二十四句からなる「秋幕中夜、独坐遅明、因陪陳翽郎中、晨謁上公、因書即事、兼呈同院諸公（秋幕の中夜、遅明に独坐す、因りて陳翽郎中に陪す、晨に上公に謁して因りて即事を書し兼ねて同院の諸公に呈す）」がある。詩題の「上公」は盧綸が幕職官として仕えていた渾瑊を指す。この詩の前半には秋夜の平穩閑静な幕府の様子が描かれ、また「熙熙造化功、穆穆唐堯年（熙熙たる造化の功、穆穆たる唐堯の年）」と、渾瑊の功績によつて平和が保たれていることが称揚されており、末尾では平穩な状況に身を置く自身が次のように描かれている。

蹇辭慚自寡 蹇辭 自ら寡きを慚じ

渴病老難痊 渴病 老いて痊え難し

書此更何問 此に書するに更に何をか問わん

辺韶唯昼眠 辺韶 唯だ昼眠するのみ

「辺韶」は後漢の人、字は孝先。当時、弁舌にたけた者として著名であつた人物である。あるとき昼寝していたのを弟子達に嘲笑されたことに對し、經書のことを考えるために眠り、夢の中では周公とあつていたと言ひ返した、という話が『後漢書』文苑伝にみえている。盧綸がここで自分を辺韶に喩えているのは、辺韶が文苑伝に出てくるほどの人物であつたことを踏まえると、單に昼寝という行為が一致しているからということにとどまらず、詩人としての自負をも誇示するねらいがあつたからかもしれない。この詩でとりわけ注意したいのは、先に引用した「首冬寄河東昭德里書事貽鄭損倉曹」と同じく、平和な生活が渾瑊によつて保証されていることが示されている以上、盧綸の昼寝は、李端や司空曙のような隱者としての行為とは違い、世俗と密接に関わつてゐる点である。

このように盧綸の詩では、昼寝が隱者特有の行為ではなく、世俗に身を置く人物の日常的な行為として昼寝が描かれており、從來とは異なる、新しい描き方がされている。こうした昼寝の描き方は、盧綸の後輩にあたる白居易に引き継がれているようである。日が出てからの居眠りをうたつた「春寝」をみてみよう。

何処春喧來 何の処にか春喧來たる

微和生血氣 微和 血氣に生ず

氣熏肌骨暢 氣は熏じて 肌骨は暢び

東窓一昏睡 東窓 一たび昏睡す

是時正月晦 是の時 正月の晦

假日無公事

假日 公事無し

爛熯不能休

爛熯として休する能わず

自午將及未

午より將に未に及ばんとす

緬思少健日

緬<sup>はるか</sup>に思う少健の日

甘寝常自恣

甘寝 常に自ら恣まみにす

一從衰疾來

一たび衰疾してより來<sup>このかた</sup>

枕上無此味

枕上 此の味無し

休暇中の白居易は、春の暖かな陽氣が差し込む東側の窓の下、居眠りをしてしまう。この詩には青年の頃と年老いた後の昼寝の味わいが比較されることによつて老いたことに対する白居易の嘆きを読み取ることができる。ここで注意したいのは、「假日 公事無し」といつているように、白居易が特に隠遁しているという状況においてではなく、何気ない日常の行為としての昼寝に関心を寄せていることである。この点では、隠逸を意識して昼寝を詩に取り組んでいた李端や司空曙らと趣を確かに異にしているといえるだろう。一方、盧綸の場合と比較してみると、仕官していた人物や自分の仕える人物との対比の上で昼寝が詩に取りあげられており、世俗と密接に関わっていたという点で、白居易の昼寝は盧綸とかなり近い。隠逸という世俗から完全に切り離された場での昼寝に関心が寄せられているのではなく、むしろ所謂中隱的な、世俗と大きく関わっている状態での昼寝に目がむけられているだけに、盧綸及び白居易の場合は、隠者というより士大夫の日常的な営為として昼寝が描かれていると考えられよう。日常的行為として昼寝を詩に取り上げるということからみると、白居易の作品は李端や司空曙よりも盧綸と共通しているのである。盧綸の詩は、確かに白居易のような具体的な昼寝の描写を欠いているが、

ただ、日が出てからのねむり、という日常の何気ない行為を詩に取り入れ、またそこに平穏な喜びを発見しているという点に着目すると、盧綸の詩は白居易の先蹤になっていると認めることができるだろうし<sup>二三</sup>、さらにまた本稿の冒頭に引用した、士大夫の日常として昼寝を取り上げている蘇軾「南堂」のような詩は、盧綸や白居易に端を発していると言えるだろう。

#### 4 僧侶の昼寝

白居易と同時代の詩人である韓愈の詩にも昼寝を取り上げているものがいくつかあるが、その中で最も異彩を放っているのは「嘲鼾睡二首（鼾睡を嘲す）」（其一）である。この詩では、澹師のいびきの凄まじさは天地の不仁に起因し、それを治療するためには靈藥を求め与えるより他に手だては無い、ということがうたわれている。ここでは、この詩で言わんとしている韓愈の意図を詳細に検討することはひとまず措き、いびきを描写している前半に着目してみたい。

澹師昼睡時

澹師 昼睡の時

声氣一何猥

声氣一に何ぞ猥らならん

頑颯吹肥脂

頑颯 肥脂を吹き

坑谷相鬼磊

坑谷 相鬼磊たり

雄哮乍咽絶

雄哮 乍ち咽絶え

每発壯益倍

毎に発して壯益す倍す

「澹師」は諸葛亮という僧侶の名。三句目以降は澹師のいびきが尋常ではないことを比喻などを使って多様に描写する。

「頑颯」は強く吹きつける旋風のこと。その凄まじく吐かれる息が肥えた澹師の体を吹きつける。「坑谷相嵬磊たり」は、いびきをするたびに上下運動をする腹の喻え。五、六句目では、呼吸がときに途絶えたかと思うと、すぐさまいびきが発せられ、その都度いびきの音がますます大きくなるとたい、時間の経過にともない度を増していくいびきを具体的に描く。昼寝をしている人物を詳細に描いているという点では、簡文帝の婦女の昼寝を描いた作品に通じるものがあるが、簡文帝があくまでも女性の艶めかしさを際立たせるために、昼寝をしているその姿態を細かく描いていたのに対し、韓愈の場合は同じ居眠りという行為を取り上げながらも、いびきという、寝ているときに起こる特殊な現象を諧謔的に取り上げている点が新しい。

このように、中唐の詩人たちが従来とは異なる角度から昼寝を取り上げ、昼寝の表現が多様化していることは、宋詩の濫觴にもなっているという点で注意しなくてはならないだろう。中唐と宋代の関連性は、これまですでにしばしば論じられていることではあるが<sup>二五</sup>、昼寝という題材を通してみても両者は密接な関係にあるということが本稿を通して確かめられたと思う。

#### まとめ

以上、唐代に到るまでの、昼寝を題材とした詩が、どのように継承され展開しているのかをたどってみた。これまで見てきたように、どのような人物の昼寝が描かれているのかということに着目すると、先に挙げたように大きく四点にまとめることができる。ただ、詩人たちがこめていたねらいは、昼寝をしている対象ごとに異なっていた。(1) 婦女の場合は女性



としての艶麗さを際立たせるものとして、(2) 隠者の場合は反世俗的意識を投影した生活を表すものとして、(3) 士大夫の場合は中隠的な生活を象徴するものとして、(4) 僧侶の昼寝の場合は諧謔味をもった行為として描かれていた。

このうち冒頭にあげた蘇軾「南堂」のような、宋代にみられた士大夫の何気ない日常生活の一齣として昼寝を描いたものについては、大暦の詩人盧綸あたりにその濫觴が求められると思う。宋人の詩の濫觴としては白居易、元稹といった中唐の後期にあたる元和期の文人に求められることが多いけれども<sup>二四</sup>、昼寝を題材とした詩に関しては、そのはじまりをやや時代を遡った中唐前期にあたる大暦という時代にみることができだろう。唐代文学史、より細かく言えば白居易らに代表される元和期の文学を考える際には、大暦という時代はやはり見逃すことができないのである。

## 注

(一) 本稿で宋詩を引用する際には『全宋詩』（北京大学出版社、一九九八年）を用いた。

(二) 南宋周密（一二三二～一二九八）『齊東野語』巻十八「昼寝」の条には、宋人六名の昼寝を題材とした詩が各一首ずつ、丁謂を筆頭に引用されている。周密が引用する詩はいずれも冒頭に引いた范成大のような、日常のごくありふれた行為として昼寝を描いているものである。周密自身もまた昼間の暑いときにはいつも居眠りをし、客人から居眠りを嘲笑されたときには、丁謂らの詩を口ずさむことでなぐさめしていると述べている。

(三) 韓愈が「昼当為画字之誤也。卒予四科十哲、安得有昼寝之責乎」(『論語筆解』卷上)と述べ、孔子の優秀な弟子であつた卒予が昼寝をして孔子に叱責されるはずがないと言いつてゐるのは、韓愈自身が昼寝という行為を怠惰の表れとして受け止めていたことを裏付けていよう。唐李匡父『資暇錄』に「梁武帝説為室之寝、昼作胡卦反。且云当為画字」とあり、李匡父が何によつて梁武帝の解釈を引用したかは不明であるが、注一で触れた周密『齊東野語』に「嘗見侯白所注論語、謂昼字当画字、蓋夫子惡其画寝侈侯、是以有朽木粪牆之語。然侯白、隋人」とみえることからすると、恐らく六朝期に「昼」を「画」に作るテキストがあつて、韓愈はこうしたテキストによつて「昼当為画」と述べたに違ひない。「昼」が「画」であるなら「寝に画す」と読め、この場合寢室に絵を描いたということになるから、昼寝をたしなめられるという意はなくなる。ちなみに荻生徂徠『論語微』は「昼寝に処るとは、蓋し言うべからざるもの有り」と述べ、日中から女と寝ていることと解している。なお、昼間から婦女と寝るといふ話は、例えば『世説新語』言語篇に「殷(仲堪)在妾房昼寝」とみえている。

(四) 中国古典詩における昼寝について触れているものとしては、先に引用した桜井達彦「夏のひるね」のほか、小川環樹「留学の追憶 中国人とひるね」(『小川環樹著作集 第五巻』筑摩書房、一九九七年 初出は『細風』第一八号、一九八五年)、植木久行「夏の詩 昼寝」(『唐詩歳時記』講談社、一九九五年)がある。

(五) 宋代以前の詩人の生卒年を記すにあたっては、曹道衡／沈玉成編撰『中国文学大家大辞典 先秦漢魏晉南北朝卷』(中華書局、一九九六年)、周祖譚編撰『中国文学大家大辞典 唐五代卷』(中華書局、一九九二年)によつた。

(六) 唐詩を引用する際には『全唐詩』(中華書局排印本、一九六〇年)を用いた。

(七) 訓読は村上哲見『李煜』(岩波書店、一九五九年、三七頁)を参照した。

(八) なお、宋以降の詞に關していは、例えば蘇軾「菩薩蠻 回文夏閨怨」(『全宋詞』中華書局、一九七七年)に「柳庭風靜人眼星。

星眠人靜風庭柳。香汗薄衫涼。涼衫薄汗香」と昼寝をする女性が取り上げられている。

(九) 『世説新語』下卷、上「任誕」に、「王子猷居山陰、夜大雪、眠覺、開室、命酌酒。四望皎然。因起彷徨、詠左思招隱詩。忽憶戴安道。時戴在剡、即便夜乘小船就之。經宿方至、造門不前而返。人問其故、王曰、吾本乘興而行、興盡而返、何必見戴」とみえる。

(一〇) 盧綸の生卒年については、植木久行「唐代作家新疑年録」(『文経論叢』第二九卷第三号 人文学科篇、一九九四年)に、従来の説が考証され「七四八生?七九九没」とまとめられている。ところが近年、盧綸の生年を確定しうる記述を含んだ、盧綸の父盧之翰の「唐魏郡臨黃縣尉盧之翰妻京兆韋氏墓誌銘并序」(『全唐文補遺』第七輯、三秦出版社、二〇〇〇)が出土した。この墓誌銘によると、盧之翰の妻韋氏が死去したのは天宝四載(七四五)三月であり享年は十九歳であった。韋氏が盧之翰に嫁いだのは十五歳で、「結姻五稔にして、子一人を生(結姻五稔、生子一人)」んでいる。恐らく韋氏の生んだこの子が、盧綸を指しているに違いない。実際、盧綸「唐故魏州臨黃縣尉范曄盧府君(之翰)玄堂記」(『全唐文補遺』第七輯)には、盧之翰の妻韋氏について触れられており、そこに「夫人京兆韋氏(略)天宝四載三月廿四日、先府君終于鄭州滎沢縣之私第、享年一十九、嗣子檢校刑部員外郎兼侍御史綸、太子通事舍人綬等……」と見えることは、盧綸が韋氏の第一子であったことを確かに裏付ける。従つて盧綸の生年は、彼女が死去した年の天宝四載と確定できる。

(一一) 『後漢書』卷八十上、文苑伝の原文は次の通り。「辺韶字孝先、陳留浚儀人也。以文章知名、教授数百人。詔口辯、曾昼日假臥、弟子私嘲之曰、辺孝先、腹便便。嬾讀書、但欲眠。韶潜聞之、応時対曰、辺為姓、孝為字。腹便便、五經笥。但欲眠、思經事。寐與周公通夢、静與孔子同意。師而可嘲、出何典記。嘲者大慙」。

(一二) 盧綸と白居易の關係については、拙稿「盧綸の詩の「開朗」性について」(『大久保隆郎教授退官紀念論集 漢意とは何か』東方書店、二〇〇一年)を参照。

(一三) 植木久行『唐詩歳時記』(講談社、一九九五年、一六三頁)は「唐詩の中で、夏や冬の佳作が残っているのは、初唐・盛唐詩人よりも、むしろ中唐の詩人たちであった。これはおそらく、中唐以降の詩人たちが、盛唐の偉大な文学成果に對峙した結果、意識的

に選びとった新しい題材・詩境の開拓であり、多かれ少なかれ、宋代の詩人たちが体験し苦悩した、詩の新しさの探求でもあった」と述べている。また、松本肇「王昭君の顔」(『文藝言語研究 文藝篇』四二巻 二〇〇二年)は「宋詩に見られる傾向のいくつかは、すでに中唐詩の中に胚胎している。唐詩から宋詩への発展の過程で、中唐詩は重要な役割を果たした」と述べ、中唐文学と宋代文学の関連性を端的に指摘した上で、王昭君を取り上げた詩の検証を通して両者の関わりの深さについて論じている。

(一四) 例えば、宋代の次韻を用いて詩を贈答しあうという所謂和韻の風習は、これまで白居易と元稹に端を発しているという見方が定着していたが(嚴羽『滄浪詩話』『詩評』、顧炎武『日知錄』卷二十一「次韻」など)、実は盧綸、李端といった大暦の詩人たちにすでに先例があるということが、村上哲見『三体詩』上(朝日新聞社、一九六六年)に指摘されている。